

第3節 歴史的背景

1. 先史（旧石器・縄文・弥生・古墳時代）

■旧石器時代の痕跡

南山城地域に人が住み始めたのは3万年前から始まる後期旧石器時代のこととされますが、それを示す石器は、丘陵地で単独で出土・採集されるに留まっており、いまだ人びとの生活の実態はわかっていません。

■縄文人の生活領域

続く縄文時代に入っても、南山城地域での遺跡の発見例は少なく、断片的で、上井手遺跡（井手町）出土の石器が早期に遡る事例です。

前期に入ると、例幣遺跡（木津川市加茂町）で住居跡（1棟）が見つかるほか、ヒル塚古墳下層遺跡（八幡市）や丸塚古墳下層遺跡（城陽市）、涌出宮遺跡（木津川市山城町）で土器が出土しています。

中期では、薪遺跡（京田辺市）、芝山遺跡（城陽市）、鳥休遺跡（井手町）が集落遺跡として知られ、前期から引き続き、それぞれの地域に縄文人の生活領域がありました。この領域は縄文時代後期になっても引き継がれ、城陽市域の森山遺跡では、集落としてまとまる住居跡（6棟以上）等が発見されました。

精華町域では、このころになってようやく人々の生活の痕跡が確認されるようになり、木津川左岸の低地に立地する棕ノ木遺跡（下狛）では、炉跡（4か所）や貯蔵穴、土器溜まり等の遺構が発見され、土器・石器とともに翡翠製の^{ひすい}大珠^{たいしゆ}が出土しました。これまで丘陵地や台地上に形成されていた居住区が、低地へも広がっていったことを示す遺跡として重要

です。また、同じ生活領域と考えられる棕ノ木遺跡西方の丘陵上の大福寺遺跡（下狛）では単独で、丘陵裾の下馬遺跡（下狛）では土器とともに石匙^{いしき}が出土しています。晩期になると遺跡数も増加し、棕ノ木遺跡・下馬遺跡のほか、京田辺市域に、稲葉遺跡^{いなば}、興戸遺跡^{こうど}、三山木遺跡^{みやまき}、山崎遺跡^{やまざき}等があります。

このように、縄文時代後期以降、精華町下狛地区から北の京田辺市域にかけての地域に、縄文人の生活領域が形成されていました。



棕ノ木遺跡 翡翠製大珠
京都府埋蔵文化財調査研究センター提供



大福寺遺跡 石匙



棕ノ木遺跡から西部丘陵を望む

■弥生時代の集落と稲作

南山城に弥生文化が伝わり、稲作が始まるのは、大阪府や奈良県、さらには山城北部の乙訓地域より少し遅れてのことで、弥生時代前期の遺跡は多くありません。

このような状況のなか、宮ノ下遺跡（京田辺市）では前期の土器がまとまって出土し、木津川が形成した入り江をはさんだ南側にあたる、精華町域の山路遺跡（菱田）や百久保地先遺跡（下狛）でも同時期の土器が見つかっています。南山城地域で最初に稲作を始めた人々の居住域のひとつといえ、縄文時代後期・晩期からの重複が興味深いものです。このほか、燈籠寺遺跡（木津川市木津）でも土器が採集されています。

弥生時代中期になると遺跡の数は急速に増加し、南山城地域のほぼ全域に広がっています。南山城の南部では、宮ノ下遺跡・南山遺跡（京田辺市）、涌出宮遺跡（木津川市山城町）、燈籠寺遺跡（木津川市木津）・大畠遺跡（木津川市相楽）、畑ノ前遺跡（精華町植田）等が代表的な遺跡です。精華町域の畑ノ前遺跡では、竪穴住居が10棟確認されており、出土した土器の特徴や、石器の石材等から、近畿北部・南部の各地との交易があったことが想定されます。

精華町域の弥生時代中期の遺跡として、このほかに祝園遺跡（南稻八妻）や乾谷遺跡（乾谷）がありますが、石庖丁等の石器が採集されているだけで、詳細は不明です。それぞれの遺跡で発掘調査を行いました。関連資料の出土はありませんでした。

なお、畑ノ前遺跡に近く、同じ木津川左岸の丘陵縁辺部に立地する大畠遺跡は、隣接する相楽山銅鐸を管理する集落であり、この時期の中核的な集落とみられ、畑ノ前遺跡を含んだひとつの集団とも考えられます。

弥生時代後期になると、精華町域では、薬師山遺跡・西ノ口遺跡（菱田）、棕ノ木遺跡・大福寺遺跡（下狛）、畑ノ前東遺跡（植田）等があらわれ、やがて古墳時代を迎えます。

■古墳の出現と渡来人の集落

古墳時代の南山城では、前期には椿井大塚山古墳（木津川市山



畑ノ前遺跡（遺跡公園）



畑ノ前遺跡 弥生時代竪穴住居



畑ノ前遺跡 石庖丁



棕ノ木遺跡 弥生土器
京都府埋蔵文化財調査研究センター提供



鞍岡山3号墳全景

城町)、中期には久津川車塚古墳(城陽市)を頂点とする大型の前方後円墳が築られました。前期には、椿井大塚山古墳以外にも八幡丘陵等、南山城の各地に大型の前方後円墳がみられましたが、中期になると、大型の前方後円墳は久津川古墳群に集約されました。大型古墳の分布の推移は、政治勢力の変化を反映しています。

木津川左岸に位置する精華町域・旧木津町域では、古墳時代を通じて円墳を中心とする多様な古墳を確認しています。

古墳時代前期から中期にかけて(3世紀後半～5世紀)、精華町内には、西部の丘陵上を中心に、平谷古墳群(菱田)・鞍岡山古墳群(下粕)・北尻古墳群(北稲八間)といった複数の古墳群が出現しました。このうち、鞍岡山古墳群は4基から成り、古墳時代前期後半から中期初頭に築造された3号墳は、墳丘を葺石で覆う大型の円墳で、2基の島状遺構を有します。短甲や剣・刀等の武器、滑石製の石製品、船の線刻を施した円筒埴輪等多くの副葬品が出土しました。

古墳時代中期末から後期初頭には、木津川左岸の自然堤防に棕ノ木古墳群(下粕)が築られました。

古墳時代後期(6世紀)になると、小型古墳が密集する群集墳が築られました。畑ノ前古墳群(植田・精華台)・畑ノ前東古墳群(植田)にみられる人頭大の川原石を積み上げた石室は、近畿には類例がなく、岐阜県や愛知県に集中して分布しており、精華町域と東海地方との深い関係を示しています。

また、古墳時代の集落跡としては、棕ノ木遺跡(下粕)・柿添遺跡(下粕)・北稲遺跡(北稲八間)・森垣外遺跡(南稲八妻)を確認しています。森垣外遺跡は、朝鮮半島の影響が強い大壁住居や陶質土器が出土しており、渡来人の集落と位置付けられます。



鞍岡山3号墳出土鉄製品



畑ノ前東1号墳 横穴式石室



森垣外遺跡 大壁住居
京都府埋蔵文化財調査研究センター提供

2. 古代 (飛鳥・奈良・平安時代)

■古代の郷と寺院

南山城では、7世紀になると古墳は造られなくなり、代わって仏教寺院が建立されはじめました。木津川右岸の高麗寺跡(木津



里廃寺 基壇

川市山城町上狛)は、7世紀初頭に創建された南山城最古の寺院跡で、日本最古の寺院である飛鳥寺(奈良県明日香町)と同範の瓦が出土しました。また、7世紀後半に整備された塔・金堂・講堂の基壇が残されています。一方、左岸に位置する里廃寺(精華町下狛)は、7世紀後半から8世紀後半にかけて存在した古代寺院で、瓦や基壇が発見されました。

『倭名類聚抄』によれば、古代の相楽郡には7つの郷があり、そのうち下狛郷・祝園郷が現在の精華町域に含まれます。下狛郷は大狛郷(木津川市山城町上狛)とともに朝鮮半島北部の高句麗からの渡来系氏族である狛氏の拠点で、高麗寺や里廃寺も狛氏が建立した寺院と位置づけられます。また、祝園は、古くはハフリソノ(波布理曾能・羽振苑)と呼ばれ、『古事記』・『日本書紀』に収められたタケハニヤスヒコの伝説に登場する土地です。

■平城京の建設を支えた地域

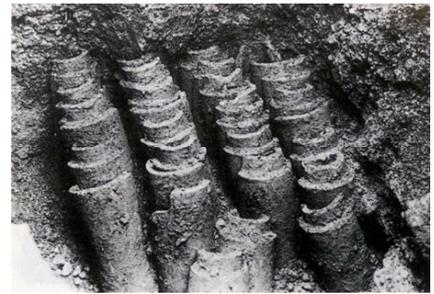
和銅3年(710年)、都が平城京に遷されると、近隣の精華町域は大きな影響を受けました。平城京の建設に必要な多量の瓦を生産するために、平城山丘陵に多数の国営瓦工場群が設置されました。精華町域でも乾谷瓦窯跡・得所瓦窯跡(柘榴)を確認しています。

また、都と地方を結ぶ幹線道路である山陰道と山陽道が精華町内を貫通していたと想定されており(遺構は未発見)、木津川水運とともに、平城京と諸国を結ぶ交通・輸送の大動脈の一角を占めていました。

国から人びとへ田を与える班田収受制を実施するため、土地を碁盤の目状に区割りした条里制の整備が進められた影響で、町域には条里制に由来する土地の区画や小字名が今もよく残されています。

■奈良時代の豪族と建物跡

奈良時代の町域を代表する遺跡として、畑ノ前遺跡(植田・精華台)・樋ノ口遺跡(山田・木津川市相楽)が挙げられます。畑ノ前遺跡は、総数23棟の掘立柱建物や、高さ3.5m、直径1.1mにおよぶ巨大なヒノキの一木を使用した深さ約7mの井戸が出土



乾谷瓦窯跡の丸瓦出土状況



条里制の区画が残る平野部
国土地理院提供



畑ノ前遺跡の巨大な井筒



樋ノ口遺跡出土の施釉陶器
京都府埋蔵文化財調査研究センター提供

し、豪族の居館ではないかと考えられています。樋ノ口遺跡は、多量の二彩・三彩陶器、^{りよくゆう}緑釉単彩陶器が出土し、その性格をめぐって離宮・寺院等の諸説が提示されています。

なお、孝謙(称徳)天皇に仕え厚い信任を得た女官の^{いなはちまのすくね}稲蜂間宿禰^{なかもらめ}仲村女は、精華町北稻八間・南稻八妻付近を本拠とした豪族の出身とみられ、畑ノ前遺跡や樋ノ口遺跡と稲蜂間氏が関連する可能性もあります。



祝園神社

■南都参詣と柞の杜

平安京への遷都後も、精華町域は、都(平安京)と南都(奈良)とを結ぶ街道・水路沿いの要所に位置しました。撰閲家として権勢を誇った藤原氏の氏神である奈良の春日社(春日大社)へは、天皇・上皇・貴族が参詣に訪れ、途中、^{ははそ もり}柞の杜で休憩をとることもありました。柞とは、コナラや近似種のクヌギ等、どんぐりのなる落葉樹の総称で、柞の杜は、現在の祝園神社付近に比定される紅葉の名所です。平安~鎌倉時代には^{うたまくら}歌枕として広く知られ、多くの和歌に詠まれました。新古今和歌集の選者として知られる藤原定家も「時わかぬ浪さへ色にいづみ河 は、その杜に嵐吹らし」と詠んでいます。



常念寺 木造菩薩形立像

■多彩な平安仏

精華町内には、平安時代に制作された仏像彫刻が数多く残されています。奈良時代の作風を色濃く残す平安時代初期の^{いちぼくづくり}一木造の仏像をはじめ、^{わよう}優美な像容を表す和様の仏像、院政期の^{よせぎづくり}寄木造の仏像まで多彩な仏像が残されており、京都(平安京)と奈良(南都)の間であって文化交流の盛んな地域であったことを示しています。

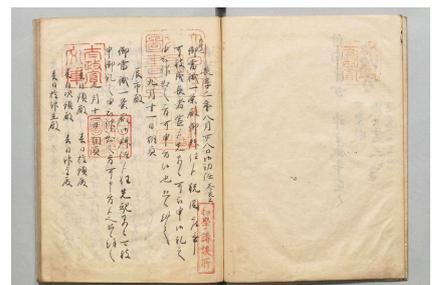


安楽寺 木造阿弥陀如来坐像

3. 中世 (鎌倉・室町・戦国時代)

■さまざまな荘園

平安時代から室町時代にかけて、貴族・寺社の私有地である^{しょうえん}荘園が精華町域にも広く存在しました。祝園荘は藤原氏・春日社・平等院、菅井荘は興福寺と春日社、^{いなやづまのしょう}稻八妻荘(稻間荘)は平安~鎌倉時代には石清水八幡宮・藤原氏・春日社、室町時代には



宣胤卿記 祝園荘の記事
国立公文書館提供

室町幕府の支配を受けました。室町時代中期（15世紀後半）になると、祝園荘や菅井荘は地元武士の侵略を受け、荘園領主による支配が困難となりました。

■山城国一揆

応仁元年（1467年）、京都に始まった応仁・文明の乱は、将軍の後継問題と、将軍の補佐役である管領を務める^{しば}斯波家・^{はたけやま}畠山家の家督争いなどが複雑に絡まった大規模な戦乱です。南山城も、文明2年（1470年）に西軍方に属する大内氏が進出して以降、長く戦場となりました。下^{おおきた}粕の大北氏をはじめ南山城の^{こくじん}国人（武士）の多くは、東軍である細川勝元の被官でしたが、山田の中黒氏のように西軍方の^{よしかど}斯波義廉の被官となった者もありました。最終的に西軍が圧勝し、大北氏の居城であった大北城を奪い本拠としました。大北城には西軍方である大和国の古市氏が大内氏とともに入っていましたが、文明9年（1477年）に両氏の軍は大北城を破棄して帰国し、応仁・文明の乱は終結しました。

その後も乱の影響による戦乱は続きました。乱の一因であった畠山家の内紛は収まらず、文明15年（1483年）、畠山義就軍（西軍）が再び南山城に入り、畠山政長方（東軍）との戦闘が再発しました。やがて戦況は膠着状態に陥り、地域社会が長年の戦乱で疲弊するなか、文明17年（1485年）、南山城の国人衆は東西両軍にかかわらず一致団結し折衝を重ね、両畠山軍の国外退去を実現させました。その背景には「土民」（農民）の意向が反映されていると考えられています。こうして成立した^{やましろのくにいっき}山城国一揆は「惣国」と称し「掟法」を定め、7年9か月ほどの間、国人衆の合議に基づく自治政治を実行しました。

しかし、明応2年（1493年）、守護の支配を受け入れて国一揆は解体しました。守護支配に反対する一部の国人は^{いなやづまじょう}稲屋妻城に立て籠りましたが、守護側に攻撃され滅ぼされました。

山城国一揆が成立した中世後期は、農民が経済的成長を遂げ、^{そうそん}惣村という自治組織に結集した時代でした。北^{たけうち}稲八間の武内神社本殿の文明4年（1472年）^{むなふだ}棟札には、惣村自治を主導した人々を指す「^{おとな}老名」の文言がみられます。



大乘院寺社雑事記 稲屋妻城合戦の記事
国立公文書館提供



武内神社本殿 文明4年の棟札



下粕大北城跡と考えられる中世の堀

■戦国時代の動向

山城国一揆の解体後、戦国時代における南山城の様相は断片的にしかりませんが、国一揆解体後も南山城では国人衆の緩やかなつながりが続いていたことが確認されます。

また、東寺や興福寺の古文書からは、下粕大北氏の動向の一端をうかがい知ることができます。このほか、町内全域に中世城館にちなむ小字地名が多数存在することも注目されます。

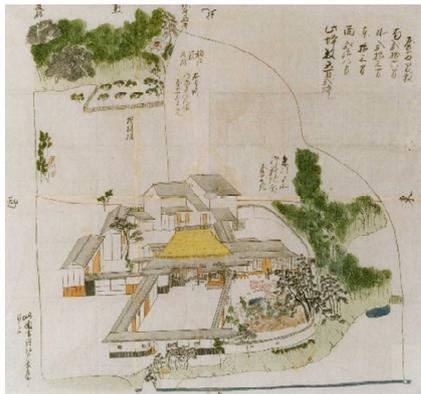


山田村検地帳

4. 近世 (安土桃山・江戸時代)

■太閤検地

安土桃山時代の精華町域の状況は、資料に乏しく不明な点が多いのですが、天正17年(1589年)の山田村^{けんちちょう}検地帳が近年発見され、南山城の^{たいこうけんち}太閤検地に関する新出史料として注目されています。



代官を務めた福井家の住宅図

■江戸時代の村

江戸時代の精華町域には、11(下粕村を4か村として数えると14)の村がありましたが、大半は1つの村を複数の領主が支配していました。領主は、朝廷(禁裏・仙洞・公家)・寺社・武家(幕府・大名・旗本)と様々でしたが、小規模な領主が中心でした。旗本領では、領地に在住する有力者を代官役に任命し、支配の実務を担わせることがみられ、旗本天野領では祝園村の森島氏、旗本大岡領では山田村の福井氏が代官を務めていました。

領主支配が入り組む村であっても、氏神祭祀や水利・山野利用については、村としての一体性を保ち、^{むらおきて}村掟を定める等、村の自治が展開されました。



北稲八間村相給絵図

■生業と山・川

江戸時代の町域の基幹産業は農業で、米を中心に綿・菜種等の商品作物も栽培されていました。農業や生活に必要な用水、草木(肥料)、薪炭(燃料)といった資源を確保するために、しばしば利害が重なる近隣の村どうしで激しい衝突が起こるとともに、共存を目指す模索が続けられました。煤谷山の境界をめぐって相楽郡菱田・下粕・北稲八間3か村と綴喜郡普賢寺郷(京田辺市)と



木津川

の間で繰り広げられた山論^{さんろん}や、煤谷川からの取水について菱田・下狛両村が争った水論^{すいろん}は、その代表的な事例です。

江戸時代初期に堤防が築かれた木津川は、支流からの土砂流入等の影響を受け、その後しばしば堤防が決壊しました。正徳2年(1712年)に発生した大洪水は、地域における江戸時代最大の木津川水害で、特に祝園村では大きな被害が生じ、数年後には同村のうち南村が集団移転しました。江戸時代の村人たちは、山や川の自然がもたらす恵みと災いに向き合いながら暮らしてきたのです。

■村人の信仰と学び

村の氏神社は、神主や宮座によって運営され、様々な神事・祭礼が執り行われました。一方で神仏習合のため、氏神社の境内には宮寺が置かれ、社僧も神事に関与していました。

村人の葬儀や先祖供養を行う檀那寺^{だんなでら}は、融通念仏宗^{ゆうずうねんぶつしゅう}(河内国佐太来迎寺末)の寺院が多く、村人の信仰を支えていました。南山城三十三所は、相楽・綴喜両郡に設定された観音霊場で、札所寺院である禅福寺^{ぜんぶくじ}(祝園)等には巡礼額が奉納されています。

江戸時代後期、町域では寺子屋が10か所開設されていました。子供たちは、師匠(北稻八間の山中氏、祝園村の森島氏、山田村の黒崎氏ら)のもとで読み書きを学びました。



春日神社六日座の神饌と注連縄(舟)



光明寺(乾谷)



川西村役場



北稻八間小学校に使用された観音堂



精華高等小学校新築落成式(明治29年)

5. 近代 (明治・大正・昭和戦前)

■行政・教育制度の変遷

明治維新によって、精華町域の村々(11か村)は京都府の管轄に置かれました。明治22年(1889年)、市制・町村制の施行を受け、狛田村・稲田村・祝園村・山田荘村の4村となりました。その後、昭和6年(1931年)には、狛田・稲田・祝園の3村が合併し川西村が誕生しました。

この間、近代教育の整備も進められました。明治5年(1872年)8月、近代学校制度に関する最初の法令である「学制」が全国に公布されますが、これに先立ち同年7月、北稻八間小学校と吐師小学校(木津川市)が開校しました。その後、行政区画・教育制

度の度重なる改変を受け、学校の統廃合が繰り返されましたが、明治19年（1886年）に小学校令が制定され、明治22年（1889年）に町村制が施行されると、1つの村に1つの尋常小学校（明治33年（1900年）から義務教育）を設置する体制が定着しました。また、明治25年（1892年）、狛田・稲田・祝園・山田荘・相楽（木津川市）の5か村は、精華高等小学校を設立し共同運営を行いました（大正9年（1920年）に分離解散）。

■鉄道の開通と都市近郊農業

地域の近代化に大きな役割を果たしたのが鉄道の開通です。明治31年（1898年）、関西鉄道の木津～四条畷（現在のJR学研都市線〔片町線〕）が開通し、祝園駅が開業しました。祝園駅は、周辺で栽培された農作物を都市へ輸送する集荷駅としての役割を担いました。昭和27年（1952年）には、下狛駅が開業しました。また、昭和3年（1928年）に、奈良電気鉄道（現在の近鉄京都線）が開通し、狛田・新祝園駅・山田川駅が開業しました。近世以来、精華町域の農業の中心は稲作でしたが、明治時代になると副業として製茶や養蚕が盛んに行われました。また、明治後期以降、都市向けの野菜や果物（ソラマメ・エンドウ・スイカ）の栽培が試みられ、都市近郊農業への模索を進めます。



祝園駅構内の貨物列車



川西村農産物販売幹旋所に並ぶスイカ

■祝園弾薬庫の設置

第二次世界大戦がはじまる昭和16年（1941年）には、町域西部丘陵一帯に陸軍の弾薬庫（おおさかりくぐんへいきほきゅうしょうほうそくてんやくしよ大阪陸軍兵器補給廠祝園填薬所。通称は祝園部隊）が建設されました。昭和20年（1945年）の敗戦によって弾薬庫は連合軍最高司令官総司令部（GHQ）に接收されますが、昭和33年（1958年）に日本政府へ返還され、昭和35年（1960年）からは自衛隊が使用しています。祝園弾薬庫をめぐることは、用地買収に伴い農地を失ったり作業に携わったりした住民も多く、地域社会に大きな影響を及ぼしました。



陸軍軍用鉄道川西側線煤谷川鉄橋（撤去前）

6. 現代（昭和戦後・平成・令和）

■精華町の誕生

第二次世界大戦後、昭和22年（1947年）に川西・山田荘・相楽3か村は中学校組合を設置し、精華中学校が開校しました。明治～大正期に存在した精華高等小学校と同じ範囲の村々で新制中学



精華中学校

校が新設され、精華という校名も受け継がれたのです。

開校後、精華中学校の校区をもとにして3か村の合併協議が進められましたが、最終的に川西・山田荘の2か村による合併が決定し、昭和26年(1951年)に精華村が誕生しました。昭和30年(1955年)には、町制を施行し精華町となりました。

■学研都市の建設と人口増加

昭和30年(1955年)に町制施行した後、日本社会は高度経済成長期を迎えました。以降、精華町は京都・大阪・奈良のベッドタウン化が進み、住宅建設と都市開発が進展しました。その最たるものは関西文化学術研究都市(学研都市)の建設です。

学研都市の建設は、昭和53年(1978年)12月の「関西学術研究都市調査懇談会」による提言を端緒として、3府県・関西経済界等によって構想が練られ、昭和62年(1987年)6月9日に「関西文化学術研究都市建設促進法」が公布・施行され、正式に国家的プロジェクトとなりました。また、これに先立ち、昭和60年(1985年)10月12日には、住宅・都市整備公団(現在の都市再生機構)による「祝園特定土地区画整理事業」の起工式が挙行され、光台地区の造成工事が始まりました。現在ではこの起工式の日が、学研都市全体の建設着工の日と位置付けられています。以後、学研都市の建設が本格化し、様々な研究・文化施設が開設されるとともに、大規模な新興住宅地区が誕生し、精華町は学研都市の中心地として急速な発展を遂げています。

昭和40~60年代には、中久保田・祝園南・北ノ堂・馬淵等、東部の平野部を中心に中小規模の住宅開発が進められていましたが、昭和60年代以降、南部・西部の丘陵で大型の宅地開発が行われ、昭和63年(1988年)に桜が丘、平成4年(1992年)に光台、平成11年(1999年)に精華台の各地区が誕生すると、町の人口は急増しました。町制を施行した昭和30年(1955年)に9,452人であった町の人口は、半世紀後の平成17年(2005年)には34,237人と3.6倍に伸びています。人口増加に伴い、小・中学校も増設されました。町制施行時には、小学校が2校(川西・山田荘)、中学校が1校(精華)でしたが、現在、小学校は5校(精北^{せいほく}・川西・精華台^{ひがしひかり}・東光・山田荘)、



精華町役場と丸山(昭和40年代)



開発直後の北ノ堂と馬淵池(昭和43年)



祝園特定土地区画整理事業起工式



造成中の桜が丘



平成11年 町域南部の空中写真
国土地理院提供

中学校は3校（精華・精華西・精華南）に増えています。近年は鉄道駅前の土地区画整理事業が進められ、平成19年（2007年）に祝園西、令和2年（2020年）に狛田の両地区が誕生しています。

■交通網の整備

開発に伴い、交通網の整備も進みました。鉄道は、平成元年（1989年）にJR学研都市線（片町線）が電化、平成12年（2000年）には近鉄新祝園駅への急行停車が実現し、町へのアクセスが一層便利になりました。また、町内外を結ぶ広域幹線道路として、昭和45年度（1970年度）に国道163号の供用が開始され、平成3～5年（1991～93年）に京奈和自動車道の町域部分（田辺西～山田川I.C.）が開通しました。

■学研都市開発の現在

学研都市の開発は、バブル経済の崩壊とその後の経済停滞の影響等もあり、必ずしも平坦な道のりではありませんでしたが、研究開発型産業施設の立地促進等の努力を重ねてきました。現在は学研狛田地区の開発が進行中です。



京奈和自動車道開通



近鉄新祝園駅急行停車



せいか祭り